



「大事なのは伝える
ことより行動する
こと」と話す井芹さん

学生から成る中国ハンセン病支援組織「家族」を結成しました。
しかし、この「家族」の活動はもちろんのこと、井芹さんは、何よりも恵楓園の所在地である合志市から活動する若者が少しずつでも増える必要があるのではないかと考えました。そして、その第一歩として地元中学生によるとんぼの里清掃を企画しました。

これは、恵楓園でみんなが交流しながら活動することでハンセン病に目を向け、その歴史と差別や

人を思う心 合志から全国へ

井芹さんは「地元の中学生が立ち上がってくれて仲間が増えたことがとてもうれしい。合志市の若者から人を思いやる心を発信できたら」と話します。

井芹さんは、今後、合志中をはじめ、市内の各小中学校でベルマーク活動を展開し、中国ハンセン病患者に物資を送る支援につなげることを目標としています。

KKCメンバーもベルマーク収集に動き始めました。

そんな井芹さんの周りにはほかの仲間も徐々に集まり増えつつあります。



こうして一人ひとりの小さな行動が集まることで大きな流れとなり、人々の心を動かす、そんなきっかけになるのかもしれない。

井芹さんは、「合志市での活動をもっと広げ、将来は県内だけでなく九州、全国に活動と支援の輪が広がれば」と目を輝かせていました。



KKCの名づけ親でもある会長の松永さん

恵楓園交流クラブ

この活動の中心になっているのは、合志中3年生が結成したKKC（恵楓園交流クラブ）のメンバー7人です。

KKCの会長を務める松永竜さんは、生徒会を通じて1年生のときから恵楓園の人々と交流し、園について学んできました。そんな中、この水路も生徒会の手でいつか復活したいと思っていましたが、なかなか実現には至りませんでした。3年生となり生徒会を退いた後、合志中の先輩である井芹和幸さんからとんぼの里の清掃活動の話が

ハンセン病から 学んでほしい

この活動のきっかけをつくり、かげながら支えているのが井芹和幸さん（栄温泉団地）です。井芹さんは、父親の和憲さんが恵楓園の入所者の人々と交流があつたこともあり、幼いころから園のたくさんの人と交流を重ねてきました。

あり、松永さんはすぐにKKCを結成。協力することにしました。松永さんは、「いつかやろうと思っていたことが実現できて本当によかったです！菊鹿中の生徒も来てくれて交流することもできました。」とうれしそうに話していました。

「人の役に立ちたい」と話す松永さん。その後も、KKCメンバーとともに何度もとんぼの里を訪れ、花の苗を植えるなどの作業を続けています。

また、8月25日には、再び菊鹿中の生徒とともに恵楓園内の施設を清掃することを計画しています。



夏の間、草取りは欠かせない作業

現在は、大学に通う傍ら恵楓園で学んだことを中国でも起こっているハンセン病問題に生かしているという活動をしています。

中国では、ハンセン病に対する人々の理解がまだまだ浅く、差別や偏見が強いといえます。

中国でのハンセン病問題を知ったとき、井芹さんは「恵楓園でいろんなことを学んだ自分に何かできないだろうか」と思いました。そこで、若者の行動力とアイディアを生かそうと今年5月には県内の大